客船よもやまばなし

〈連載262〉

10年目を迎えた北海道クルーズ振興協議会

大阪府立大学大学院　海洋システム工学分野教授
池田　良穂

北海道運輸局内に事務局を置く「北海道クルーズ振興協議会」から、毎年開催される総会の案内が来た。案内状によると、同協議会は10周年を迎えるという。その設立総会でクルーズに関する講演をさせていただき、会員の片隅に名を連ねさせていただいている関係で、毎回、総会のご案内をいただくが、なかなか出席の機会には恵まれなかった。

しかし、10周年の節目の総会でもあるし、行ってみようかと思って手帳を開くと、その当日だけぽっかりと空白で、会議も面談の予約も入っていなかった。これも神の思し召しかと、日帰りで同総会に参加することを決めた。

今年は厳冬で、3月上旬には北海道を寒波と大雪が襲い、千歳空港発着の飛行機便も乱れたりしており、12日の総会当日に、本当に日帰りできるか心配だったが、前日の天気予報では雪も少なく気温も高いということだった。大阪からは飛行機で約2時間のフライトで、途中までは晴れていてアルプスや日本海側の海岸線が窓からよく見えた。津軽海峡上空からは高度が下がったが、雪雲が多く、楽しみにしていたフェリーやコンテナ船を見ることはできなかった。さらに高度が下がって雲の下にでると、一面、雪化粧の原野が眼下に続き、やがて新千歳空港に着陸した。最近は、札幌空港ということの方が多いようだ。

さて、25年前の平成元年は、日本のクルーズ元年と呼ばれ、日本にも新造クルーズ客船の「おせあにっくぐれいす」と「ふじ丸」が登場し、以来、10隻余りのクルーズ客船が登場したが、その多くは10年を待たずに姿を消し、現在は4隻のクルーズ客船が日本市場で活躍しているものの、クルーズマーケット自体は平成元年のレベルを維持したままで、大きな成長はみられない。こうした状況を打開しようと国土交通省の海事局が振興のための委員会を作り、そして各地のクルーズマーケット振興のためのクルーズ振興協議会が各運輸局の中につくられた。

北海道クルーズ振興協議会もその1つで、その前年には関西クルーズ振興協議会が発足しており、昨年10周年を迎えた。この他、

九州、中国にも同様の協議会が設立され、各地のクルーズ振興を担っている。

北海道は、道内各地の港が連携してクルーズ誘致を行っており、着実に寄港数が増加している。協議会が設立した年の寄港数が39隻だったのに対し、昨年は70隻となっているという。この隻数増加の主因の１つが、商船三井客船の「にっぽん丸」が始めた小樽起点の定点定期クルーズ「飛んでクルーズ北海道」で、これは、①定点定期、②短期クルーズ、③リーズナブル価格、④フライ&クルーズという、北米生まれの現代クルーズの成功要因をほぼ全て網羅した日本のクルーズ界では画期的なクルーズ商品である。これが北海道のクルーズのブランド化に大きな貢献をしたことは間違いがない。

さらに来年から、米プリンセスクルーズが、８万総トンの「サン・プリンセス」による小樽港起点の１週間定点定期クルーズを６月から９月にかけて計11回実施することを既に発表している。まさに北米型で、現在、世界的に展開されている現代クルーズの定型的なモデルである。その航路がまたユニークだ。小樽を毎週土曜の夕方に出航し、函館、室蘭、釧路に寄港して、さらに北方４島の付近を通過して、網走、コルサコフに寄港する。ロシアのコルサコフに寄港するのは、同船が外国籍のためカボタージュ規制が適用されて国内の港だけを回るクルーズはできないためだ。そして土曜日の朝には小樽港に帰港する。前述したように、このクルーズは11回行われるので、消席率が100%とすると、この北海道一周クルーズだけで22,000人のクルーズ人口のアップとなる計算だ。船内では、英語が公用語だから、海外からの利用者も期待できる。

クルーズ料金は、インサイドの最も安い部屋では約10万円から、アウトサイドだと約15万円からときわめてリーズナブルな価格だ。

実は、10年前の同協議会の設立総会の時の講演の中で、筆者は、ほぼ同様の北海道一周クルーズを提案していた。その時には、日本籍船が対象だったので、北方領土付近を航海することは政府が認めないのでは、という意見も出されて、そんな政治課題もあるのだと思っていた。しかし、今回は外国籍船だから、こうした航海が実現するのかもしれない。夢にまでみていた北海道一周クルーズに大いに期待が高まる。

同船の就航で、夏の北海道のクルーズが大きな脚光を浴びることは間違いなく、そのパイオニアである「にっぽん丸」には、その相乗効果を利用してさらに躍進してもらいたいと思う。最近、日本のクルーズ客船は、世界遺産に登録された小笠原へのクルーズでおおいに盛り上がっているという。日本一周クルーズ、秋のお祭りクルーズ、夏の花火クルーズという定番企画に、さらに夏の北海道クルーズが定番になれば、日本のクルーズもいよいよ爆発的な発展に突入する可能性が大きいと思う。

「サン・プリンセス」に負けないで、「にっぽん丸」、「ぱしふぃっくびいなす」、「飛鳥Ⅱ」の３隻も北海道起点の夏季限定の定点定期クルーズをほぼ同時に行ってはどうだろうか。蒸し暑い日本の夏から逃れる「避暑クルーズ」は多くの日本人にとっては至福の旅だし、暑い東南アジア諸国の観光客、

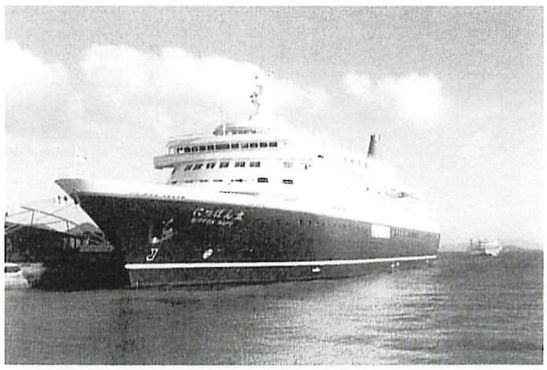
そして寒いオセアニアの観光客にとっては絶好の避寒旅行にもなりそうだ。「サン・プリンセス」の伝統的なブリティッシュスタイルのクルーズを好む人もいれば、ハイレベルな日本式ホスピタリティに溢れるクルーズを好む人の層も少なくないはずだ。

北海道は、すでに観光地としては人気のスポットとなっている。ここで、従来の陸上の北海道旅行とクルーズとの違いについて考えてみたい。筆者は北海道の室蘭の出身だが、高校をでるまではせいぜい札幌付近までが旅行圏内で、それ以遠にはほとんど行ったことがなかった。とにかく広くて移動に時間がかかるのだ。道北や道東に行ったのは大学に行ってから、長期の夏休みを利用してのことだ。現在の陸上の北海道旅行は、ほとんどが観光バスでの移動で、ホテルに泊まっては翌朝にはバスで出発というパターンがほとんどであろう。

しかし、クルーズは「目覚めれば新しい町」とのキャッチフレーズが表すとおり、ホテル自体が動くから、観光を終えて船に戻って、食事をし、ショーを楽しみ、熟睡している間に次の町に連れて行ってくれるというとても便利な旅だ。すなわち、今の北海道駆け足旅行とは違って、ゆったりと大自然と触れ合いながらの旅が楽しめる。それと陸上からは見ることのできない風景もある。海から見る知床の山々はアラスカの風景によく似ているし、室蘭に入る前に現れる白い絶壁は「ドーバーの白い壁」を思わせる。知床の山々を海上から見るのも素晴らしい。しかも、ポイントポイントで上陸して、北海道の風を肌で感じ、地元の文化に触れ、郷土料理を楽しむこともできる。

今回出席した総会後の講演会で、JTB北海道の加藤氏が、アジアの人々に知られている日本の観光地ブランドは、1位が東京で、富士山、大阪と続いて4位が北海道だという調査結果を紹介していた。しかも、特定の都市ではなく「北海道」全体が1つのブランドとして定着しているのがポイントとのこと。すなわち、北海道全体として観光振興に動くのが効果的だという。そういう視点では、広い北海道を効率的に回れる「北海道クルーズ」はきわめて有望な観光商品となりそうだ。

というわけで、ぜひ、夏の北海道クルーズを楽しんでみませんか。今夏は、「にっぽん丸」(6月に横浜起点の礼文・室蘭クルーズ。9月に小樽起点クルーズを5本実施)や「ぱしふぃっくびいなす」(6月に利尻・礼文島クルーズと小樽起点のサハリンクルーズ)、「飛鳥Ⅱ」(7月に横浜起点北海道・サハリンクルーズ)などの日本船の高質のクルーズがある。さらに、来年からは「サン・プリンセス」による小樽発着の外国船のクルーズも楽しる。



日本船として初めて定点定期クルーズをはじめた「にっぽん丸」(関正哲氏撮影)

サン プリンセス

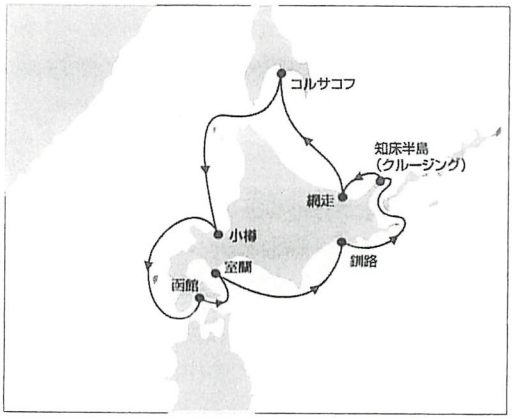
北海道周遊とサハリン 8日間

小樽 発着

2014年 6月28日(土)発 ～ 7月 5日(土)着
2014年 7月 5日(土)発 ～ 7月12日(土)着
2014年 7月12日(土)発 ～ 7月19日(土)着
2014年 7月19日(土)発 ～ 7月26日(土)着
2014年 7月26日(土)発 ～ 8月 2日(土)着
2014年 8月 2日(土)発 ～ 8月 9日(土)着
2014年 8月 9日(土)発 ～ 8月16日(土)着
2014年 8月16日(土)発 ～ 8月23日(土)着
2014年 8月23日(土)発 ～ 8月30日(土)着
2014年 8月30日(土)発 ～ 9月 6日(土)着
2014年 9月 6日(土)発 ～ 9月13日(土)着
2014年 9月13日(土)発 ～ 9月20日(土)着

日次	寄港地		入港	出港
1	小樽	日本	午後乗船	17:00
2	函館	日本	07:00	23:00
3	室蘭	日本	07:00	18:00
4	釧路	日本	07:00	18:00
5	知床半島(クルージング)	日本	14:00	17:00
6	網走	日本	07:00	16:00
7	コルサコフ	ロシア	05:00	18:00
8	小樽	日本	午前下船	—

クルーズ代金	内側	海側	バルコニー	ミニスイート
	¥99,000～	¥149,000～	¥189,000～	¥289,000～



函館／イメージ

知床半島／イメージ

来年、小樽発着の1週間北海道周遊クルーズに就航する8万トンの「サン・プリンセス」